更生刻々

第１１号
令和４年３月23日発行

東京矯正管区
Tokyo Regional Correction Headquarters
法務省東京矯正管区更生支援企画課
☎048-600-1560（直通）
1.toukyoukyousei.j7u@i.moj.go.jp
ホームページ
http://www.moj.go.jp/kyousei1/kyousei08_00101.html

広がっています。＃再犯防止

再犯防止の今を、トラウデン直美さんと安藤弘樹さんがお送りします。

YouTubeに、「法務省チャンネル」があるのをご存じですか？３月１９日（土）から、そちらで公開されている動画、それが「広がっています。＃再犯防止」です。

この動画では、コメンテーターに報道番組や情報番組でも活躍するトラウデン直美さんを迎え、フリーアナウンサーの安藤弘樹さんがコーディネーターとして、再犯防止の取組の最前線を、様々な角度からお届けしています。

動画は全部で４つあり、検察庁における入口支援や、FC東京の取組、立ち直りの当事者が語る再犯防止について、そして、静岡市における「市民が市民に寄り添う支援」の実際を紹介しており、どれも見ごたえ抜群な内容に仕上がっています。

再犯防止の取組は、国だけでなく、地方自治体の皆様、そして民間事業者の皆様にも着実に広がりを見せています。ぜひYouTubeで法務省チャンネルにアクセスいただき、皆様の目で、再犯防止の「今」をご覧ください。

広がっています。＃再犯防止　広報用チラシ

関東更生支援ネットワークからのお知らせ

新しいパンフレットができました！

以前、本紙でもちょっとだけご紹介した、関東甲信越・静岡地域で、罪を犯した人達を支援する人・機関をつなぐ「関東更生支援ネットワーク」について、このたび、新しいパンフレットを作成しました！

ソーシャルファームである「Tokyo Social Design」さんによる、障害のある方が描いたイラストを中心に、黄色と黒の二色でオシャレにまとめた素敵な仕上がりになっています！

だいたいアルバムCDくらいのサイズ感ですので、もしどこかで見かけたら、ぜひお手に取ってみてくださいね！

更生支援を語るSpecial

今回の「更生支援を語る」は、年度末スペシャルバージョンとしてお届け。
当管区のボスである、東京矯正管区長から、更生支援に対する思いを熱く語っていただきます。

第53代　東京矯正管区長　中川　忠昭

昭和55年、刑務官を拝命。帯広刑務所長、法務省矯正局成人矯正課企画官、成人矯正課長、東京拘置所長などを歴任し、令和3年度から現職。
監獄法の改正、広島刑務所からの受刑者逃走事件など、矯正の激動の時代にあって、現場叩き上げの刑務官として最前線を走り続け、この春、退職。

どうして刑務官という仕事を志したのですか？

「志」みたいな立派なものはなかったな。うちは祖母と父が刑務官だったというのが一つ。

そしてもう一つは、私の少年時代、1960年代は、学生運動が吹き荒れていたり、1970年代に入っても、連合赤軍の事件があったりして、この国はどうなるんだろう、という思いがあった。刑務官になることで、この国の治安を少しでも良くしたい、という気持ちがあったかな。

これまでの勤務の中で、印象に残っているエピソードは？

平成7年、当時はある刑務所で処遇部門の統括をしていたんだけど、60代の受刑者が、居室で自殺未遂を起こしたことがあった。私はすぐに彼と面接したんだけど、彼は「すいません、もうここで皆さんに迷惑をかけるようなことはしません。」と涙ながらに謝り、それからは自殺を図ることもなく、刑期を満了して出所した。

その日、警察から電話がかかってきたんだ。踏切に飛び込んで自殺した人がいて、誰も身元を証明する人がいなくて困っているんだけど、そちらの刑務所名が書かれた札を持っていた。そちらを出所した人ではないですか、って。私が面接した彼だったよ。

私がその時思ったのは、悲しかったのはもちろんだけど、あの時、彼を刑務所で死なせてやった方が良かったんじゃないかってことだ。

刑務所内で死んだら、身内がいなくても、少なくとも葬式は出してやれるし、電車にひかれるよりはましな死に方だったんじゃないかと。

この時の、彼に対して何もしてやれなかったという悔しい思いは、ずっと自分の中にあったんだけど、近年は、支援が必要な受刑者を刑務所から地域社会につなげていく取組が盛んにおこなわれるようになってきて、とても嬉しく思っている。あの当時、今みたいな仕組みがあれば、彼を救えたんじゃないかって思うよ。

これまでのご経験を振り返って、更生支援について思うこととは？

平成13年、名古屋刑務所での受刑者死亡事件を皮切りに、矯正行政は大きく舵を切ることになった。それまでの刑務所は、塀の中で起こることは全部自分たちで何とかしなきゃならないと思っていて、収容率が100%を超える過剰収容の状況下、明治以来の監獄法下で、海千山千の受刑者たちが起こすトラブル全てを、刑務官が背負っていた。「外」の人に頼るなんてことは、考えもしなかったんじゃないかな。

それが今は、刑務所の中に教育、心理、福祉、就労などの専門家がどんどん入ってきていて、更生保護、地域社会との連携も進み、「外」との連携が当たり前になりつつある。外に頼れる分、処遇の現場も随分やりやすくなったんじゃないかと思うよ。

とは言え、まだまだ矯正施設と地域社会との間には隙間が空いていると思うから、その隙間を埋められるよう、地域社会の理解と協力を得られるよう、我々は努力を続けていく必要があると思っている。

東京都副知事と面談し、更生支援について語る管区長（令和3年秋）